
心を襲う悲しい記憶

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を襲う悲しい記憶

【Zコード】

Z8629D

【作者名】

封弥

【あらすじ】

江戸川コナンの生活を送ってきて七年後のある日、組織の一室での大爆発により蘭を失ってしまう。その後、突然哀から別れの手紙という物が送られてきた。

1 (前書き)

「哀が苦手な方は、読まないことをお勧めします。
今回の小説は、「哀がメインなので。

其れは朝の出来事だつた。

『……ん？お早う、灰原』

灰原、と声を掛けても返事はない。
どうしてだろう。

俺は寝ていたソファから起きあがり、辺りを見渡す。
目の前にある机に視線を戻したとき、一通の手紙があつた。

『……なんだ、これ』

そつ言つて俺は手紙の封を切り、中身を取りだして紙を広げる。

『えつ！？』

手紙の一番上に書かれていた文字。

『工藤君、これは別れの手紙だと思つて』

そう書かれていた。

俺は思わず手紙を持つ手を緩め、手紙を落としてしまう。
直ぐに我に返つて、急いで手紙を拾つ。

『工藤君、これは別れの手紙だと思つて

私何処に行つたと思う？ 其れは敢えて教えないわ。
：それなりに近い場所だけどね。

貴方もよく知つてゐる場所だわ。

何度も行つたことがあるはず。

何でこの場所に行つたのか、教えてあげるわ。
その前に、前置きよ。

貴方を小さくさせてしまったのも私が原因。
辛くなつて、逃げ出したような物よ。

：現に、蘭さんを死に追いやつてしまつたのも私。
見ていられなかつた。私は、人を殺す薬を何度も作つた。
凄く、後悔しているわ。

だから貴方に会わす顔もない。

このままじや、大切な人まで殺してしまつ。

組織は確かに壊滅した。

だけど、私はまだ殺した人への償いをしていない。

こんな危険な薬を作つた私は、まだ何も償いをしていないの。

何でこの場所に行つたのかつて言つのは簡単に言つと…

小さな事でもやつて今までの罪を償いたい。

そろそろ分かつてきたかしらね。

私のいる場所。

ま、知りたかつたら博士にでも聞いてみなさい。

博士には工藤君にそんな事を聞かれたら素直に答えてつて言つて
あるから大丈夫よ。

聞きたければの話ね。

ま、聞いたら直ぐ貴方はそこに行くでしょ

どうしてそんな場所にいるんだ、とか言つてね。
だけど私はその場所から出るつもりはないわ。

この罪は、大きく深い物よ。

そう簡単に償える物なんかじやない。

罪を償い終わるのは何時か分からない。

先の事なんて誰にも分からぬいわ。

最後に。

今まで私を支えてくれて有難う。

本当に嬉しかったわ。

自分の運命から逃げるなつていつてくれて、有難う。
だから今こうして運命から逃げずに生きているわ。
自分の運命は、今私がいる場所で過ごすのが運命よ。

もしかしたら、帰れないかもしね。
そのために別れの言葉を言つておくわ

さよなら そして、元氣で…

灰原 哀

俺は、手紙を持っていた手の力を強めた。
手紙の一部がくしゃつとなつた。

俺は、灰原の手紙に書いてあつた通りにしたかつた訳じゃない。
けれど居場所は知りたかった。

蘭を失つた今では、灰原の方に好意が向いているから。

「博士ーーー！」

「おお何じや新ー」

「灰原は…何処にいるーーー？」

「……警視庁じゃよ」

「警視……庁……だと！？」

「そ、う、じ、や。哀君は自ら出頭したんじやよ。『自分は滅びた組織の生き残りだ。これまで薬で殺された人は全て私が殺した』と言つて逮捕されに行きおつたわい」

卷之二

俺は手紙を握りしめたまま、阿笠邸を飛び出した。

向左矢は勿論警視庁

方原をこのまま^葛視^ししにせんわににしかなし

私はその場所から出ぬ一毛りはない。

絶対こ離れて帰る。

卷之三

もう、蘭みたいな失い方をしたくなんて無い。

蘭が江戸川コナンの俺を「藤新一」と認識した日の夜だった。
そして其れは江戸川コナンとして過ぎて、七年が経っていた。

『新一！！！助けて！！！お願い！！！』
『待つてろー！今助けてやるか』

「助けてやるから」の「ら」を詮ねりとした瞬間に、蘭と俺の間で爆発した。

爆発が止んだときには、もう其処に最愛の人姿はなかつた。ただ、火が燃え盛つてゐるだけだつた。

その場に崩れていく俺。
頬には一筋の涙。

泣いた事なんて、無かつたのに。

…もう、大切な人を失いたくない。

灰原が捕まるより、俺が捕まる方が正しかったのかもしれない。

蘭を殺したのは、俺ですと言つて。

守つてやれなかつたのは、全て俺のせいですと。
それは今置いておいて良い。

今、助けなきやいけないのは灰原だ。

…もう、誰も悲惨な失い方をしたくない。

灰原以外にも、歩美達、園子…その他色々。

警視庁の前で肩で息をする。

全速力で走つてきただため、やっぱり体力の消耗は早かつた。
スケボーで来るべきだつたなと今更ながら後悔した。

「日暮警部！――」

「コ、コナン君？何故君が此処に」

「灰原に、会わせてください」

「灰原さんいか？分かった。面会時間の制限は」

「すいません、制限を無しにしてください。それと…灰原を、釈放

してください」

「そんな！勝手には出来んぞ！？」

「彼奴は、此処から出るつもりはないと言つていました。だけど、俺は決して許しません。…例え、彼奴が組織の生き残りだとしても。今の世界を必死に生きていて貰いたいんです。…お願いします！！！」

最終的に俺は頭を下げる羽田になる。

暫くの静寂の間も、ずっと頭を下げたままだった。

灰原を救えるのなら。

闇の世界から、解き放つてやれるのなら。

卑怯な方法であらうとも、実行する。

「…分かつた。灰原さんは釈放してやる。コナン君がそこまでいうのなら」

「有り難うござります！場所はどちらですか？」

「案内しよう」

日暮警部の後を、ゆっくりと着いていく。

灰原は、子供だから刑務所には入れられないはずだ。

：彼奴は、自分で刑務所を希望したのだろうか。

少年院ではなく、刑務所を。

「此処だ。：それと、釈放する際に扉を開けなければならぬから、

君に鍵を渡しておこう。後で必ず返すんだ」

日暮警部は其れを言い残すと、他の刑事を連れて去つていった。俺は、ノックをした返事を待たずに扉を開ける。

其處にいたのは、紛れもなく灰原だった。

「やつぱり来たのね。此處に来れたと言つ」とは、博士に聞いた…

「帰るぞ」

「…いいえ」

「そう言つだらうとは思つたけど、絶対に一人にさせない。…もつ、誰も失いたくないんだ」

「え？」

「蘭と同じようご、夢でも蘇つてしまつような失い方をしたくない。…お前は、闇から解き放たれるべきなんだ。警部からも許可を貰つてゐる」

「きよ、許可つて…！貴方釈放許可を…？」

「警部に頭下げてまで頼んだ」

「貴方子供の状態なのに…！」

「警部も、お前を逮捕する気はなかつたんだそつだ」

「…？」

「第一子供が刑務所にいること自体可笑しい。普通なら少年院だろ

？」

灰原は、即私が希望したのよと答える。
そしてそれにやつぱりなと俺も答える。

「もう、お前を失いたくない。…蘭と同じようご

「工藤君…」

暫く見つめ合つたままの俺等だったが、俺は直ぐに立ち上がり鍵穴に鍵を差し込み、ゆっくり回す。

高い音と共に、鍵を元の方向に回し、鍵を取る。

そして俺はゆっくり扉を引いた。

「…帰るつ、灰原」

「……本当に、帰つて良いの？こんな私が、帰つて良いの！？」

「ああ良いんだ。今を充実しろ」

「…つ、ありがとう」

灰原は掠れた声でそう言った。

次の瞬間、俺は体に少し重みを感じた。
無理もない。

目の前で、灰原が俺の服に顔を埋めているから。

ふつと笑いそつと灰原の頭に手を乗せた後、暫くこの状態だった。

阿笠邸。

「…御免なさい。氣でも狂つたっぽいわ
「いいや、氣にしてないから」

警部に鍵を返し、博士の家に戻つた俺達。
地下室で灰原は暫くの間、寝ていた。
ここ数日、灰原は寝ていなかつたから。

きっと、手紙の内容を考えていたのだろう。

「…ゆづくり寝ろよ。灰原」

そう呟いた後、俺は灰原の寝ているベットの端で腕を組み、頭を乗せた。

今、この部屋から出てしまえば灰原がまた消えてしまう……そんな気がした。

何処にも…行かないで。

どうか…夢く消えないで。

俺の願いはただ其れだけ。

蘭のような悲しすぎる失い方をしたくない。

もつ…嫌なんだ。

戦いで、心から大切に思っている人を失うのが。
怖いだけかもしれないけれど… ただ、嫌だった。

蘭は、灰原以上に守つてやりたかった。

想いも伝えられずに蘭を失つてしまつた。

コナンのままで… 正体を明かした当田に蘭を失つた。

悲しかつた、泣いてしまつほどに。

辛かつた、胸が苦しくなつてしまつほどに。

虚ろだつた、心も体も全て。

途方に暮れた、どうすればいいのか其処で分からなくなつてしまつた。

絶望した、蘭への想いも、何時か嫁に迎えてあげよつといつ望みも全て。

後悔した、想いを伝えられなかつたこと・工藤新一に戻つてやれなかつたこと・早く正体を明かさなかつたこと。

これ以上にまだまだ気持ちはある。

数え切れないほどに。

：蘭。今空の上でどんな生活をしている？

本当に、御免。

何度謝つても足りねえぐらい。

最後まで工藤新一に戻れなかつたこと、最後まで想いを伝えられなかつたこと、正体を明かさなかつたこと。
此が一番大切な事じやないのか。

何故、江戸川コナンになつたとき素直に工藤新一と言つて、その体になつた事情を話さなかつたんだろう。
正体を隠せとは貸せに言われ、その言われるがままにしていた。
そんな馬鹿な自分がいたんだな。

そんな事を想いながら、田を閉じ夢の中へと身を投じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629d/>

心を襲う悲しい記憶

2010年10月10日02時58分発行